

# 平成30年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－6号)

農林総合研究センター  
平成30年6月28日調査

## 気象経過

<平年対比>

### 【平均気温】

・6月第5半旬は、金沢は並、輪島はかなり高い（平年差：金沢+1.2℃、輪島+1.5℃）

### 【日照時間】

・6月第5半旬は、金沢、輪島ともかなり多い（平年比：金沢224%、輪島218%）

### 【降水量】

・6月第5半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない（平年比：金沢0%、輪島0%）

### 【1ヶ月予報】

6月28日発表の1か月予報（6月30日～7月29日）では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

## 生育概況等

### 【本田の生育】

#### 1. 出穂期

ゆめみづほの出穂期は、加賀地域の平坦部で7月16～22日頃と近年並、能登地域（羽咋～中能登）は7月21日頃と近年に比べ1日程度早くなると見込まれる。また、能登地域（奥能登～珠洲）の能登ひかりの出穂期は、7月26～28日頃と近年より3日程度遅く、前年より3日程度遅くなると見込まれる。

#### 2. 葉齢

コシヒカリは、県平均+0.4葉（県平均102%：加賀+0.1葉、能登±0葉）となっている。コシヒカリの葉齢展開からみた生育の遅速は、平年並と見込まれる。

ひやくまん穀は、県平均+0.9葉（県平均110%：加賀+0.4葉、能登+1.3葉）となっており、葉齢展開からみた生育の遅速は、加賀地域では前年並、能登地域では10日程度早いと見込まれる。

#### 3. 草丈

コシヒカリは平年比97%（加賀地域97%、能登地域95%）と加賀地域は平年並、能登地域は平年に比べやや短い。

ゆめみづほは近年比114%（加賀地域116%、能登地域110%）といずれの地域も近年に比べ長い。

ひやくまん穀は前年比117%（加賀地域111%、能登地域124%）といずれの地域も前年に比べ長い。

#### 4. m<sup>2</sup>当たり茎数

コシヒカリは、平年比102%（加賀地域100%、能登地域105%）と加賀地域、能登地域とも平年並。

ゆめみづほは近年比106%（加賀地域105%、能登地域108%）といずれの地域も近年並。

ひやくまん穀については、県平均530本/m<sup>2</sup>（前年比119%）、加賀地域では531本/m<sup>2</sup>（前年比93%）、能登地域では529本/m<sup>2</sup>（前年比166%）となっている。

最高分げつ期は、県下の調査地点の内、加賀地域のコシヒカリで1割強、ゆめみづほについては約1/4の圃場で達しているが、能登地域については、いずれの品種も達しておらず、いずれの地域も平年及び前年に比べ遅れており、特に能登地域で遅れている。

#### 5. 葉色

コシヒカリは平年並の4.2（葉色板値）となっている。

ひやくまん穀は、コシヒカリよりもやや濃く、4.5（葉色板値）となっている。

## ㎡当たり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	533本	（平年比 102%	前年比 91%）	29.3	本/株
	加賀	522本	（平年比 100%	前年比 90%）	28.9	本/株
	能登	550本	（平年比 105%	前年比 93%）	29.8	本/株
ゆめみづほ	県平均	591本	（平年比 106%	前年比 92%）	32.0	本/株
	加賀	590本	（平年比 105%	前年比 92%）	32.9	本/株
	能登	592本	（平年比 108%	前年比 92%）	30.1	本/株
ひやくまん穀	県平均	530本	（平年比 —	前年比 119%）	30.0	本/株
	加賀	531本	（平年比 —	前年比 93%）	31.6	本/株
	能登	529本	（平年比 —	前年比 166%）	28.5	本/株

### 【病害虫の発生状況】

雑草地におけるカメムシ類の発生は平年に比べ多く、特に飛翔性カメムシ類が多い。

### 当面の対策

1. 早生の1回目の穂肥は、適期の幼穂長（ゆめみづほ：1～2mm出穂23日前、能登ひかり：2～3mm出穂20日前）を確認し、遅れずに施用する。  
ゆめみづほの穂肥については、葉色が濃いほ場（葉色板値4以上）や茎数が650本/㎡を超えているほ場では時期は遅らせず施肥量を減らして施用し、2回目は出穂7～10日前に基準量を施用する。
2. 今後、土壌窒素が急激に無機化されることが予想される。

#### 【コシヒカリ】

**出穂の早い加賀地域で下位節間の伸長、全県的には弱勢分けつの発生が懸念されることから、過繁茂及び籾数過剰を防止し、登熟能力の高い稲体に誘導するため、7月上旬まで中干しを継続する。**

また、5月20日以降に移植されたほ場においては、7月第3半旬まで中干しを継続する。

#### 【ひやくまん穀】

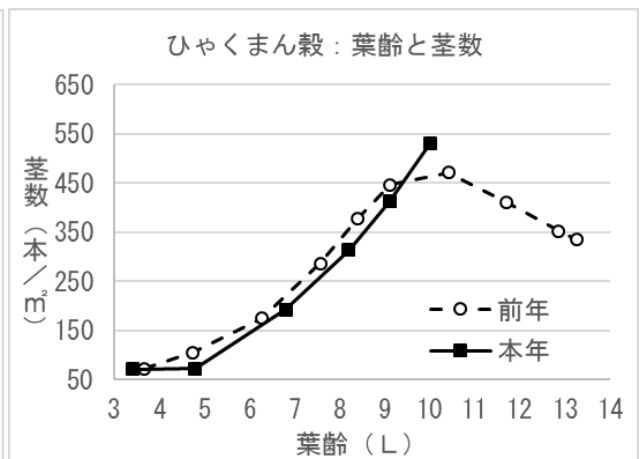
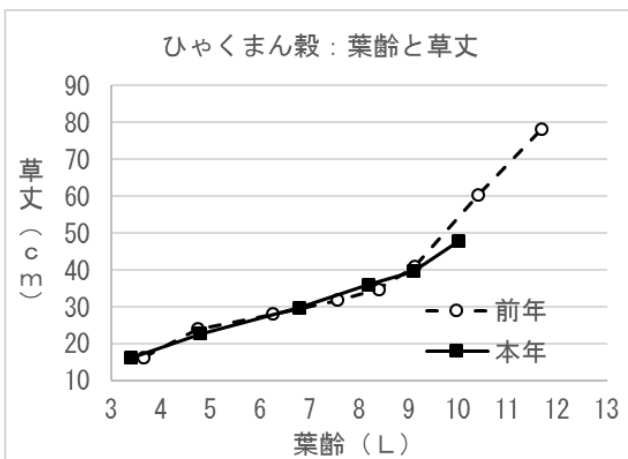
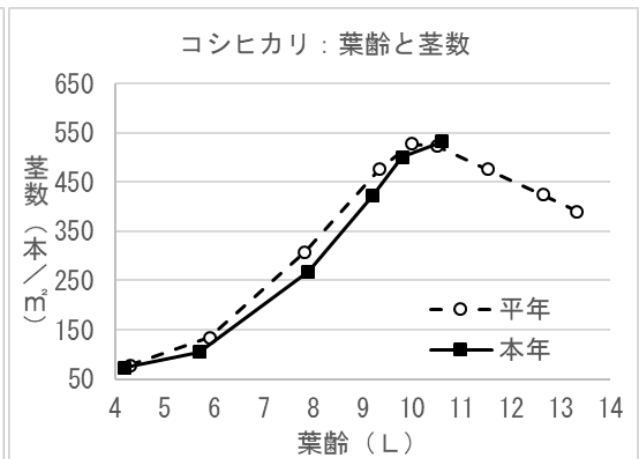
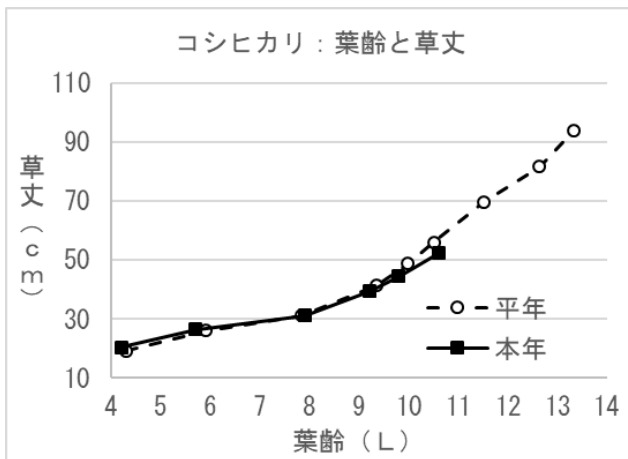
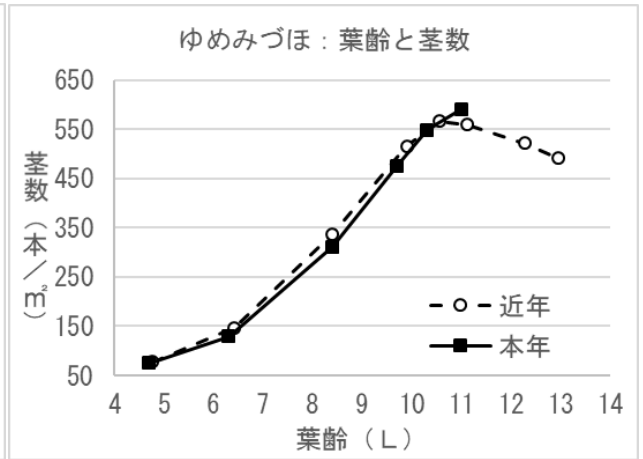
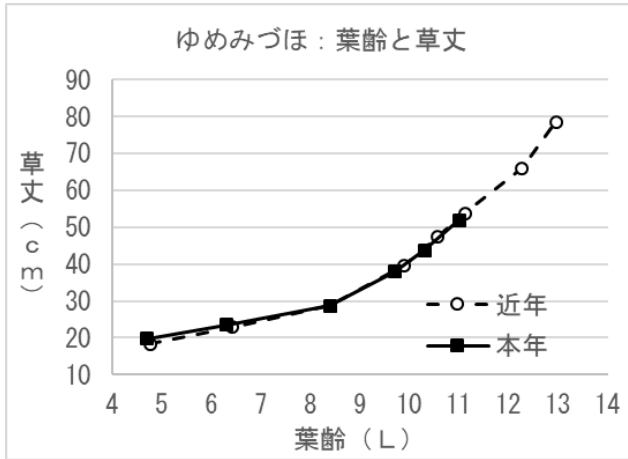
**過繁茂及び籾数過剰を防止し、登熟能力の高い稲体に誘導するため、7月中旬まで中干しを継続する。**

**既に十分な茎数を確保しており、今後発生する弱性分けつを確実に淘汰する必要がある。能登地域では前回調査から急激に茎数が増加しており、早急な茎数抑制が必要である。**

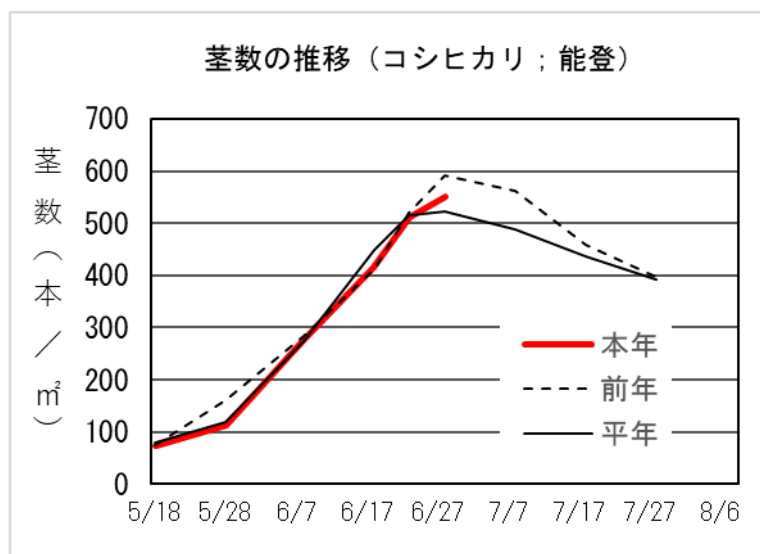
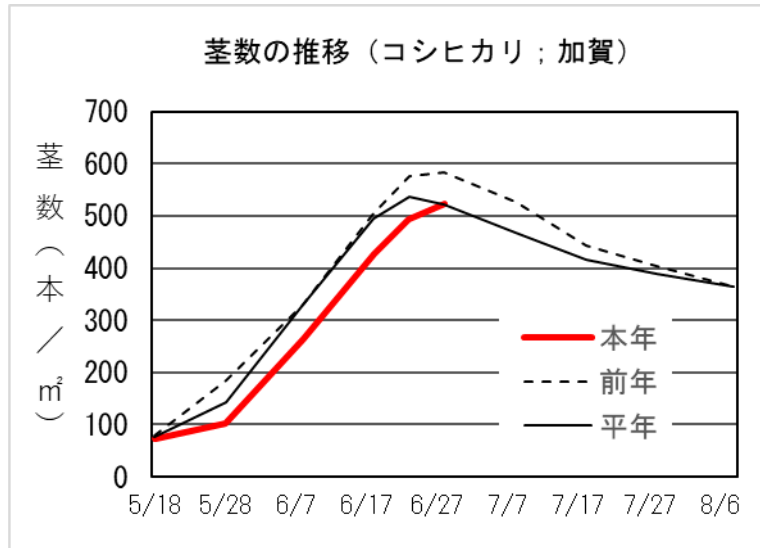
3. 斑点米カメムシ類の発生が多くなっているため、生息密度を下げるため、引き続き7月上旬まで生息場所である畦畔や農道の除草を徹底する。除草は、集落など地域全体で一斉に実施すると効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。  
なお、ひやくまん穀の防除適期はコシヒカリと異なることに留意し、防除を徹底する。
4. 穂肥施用後は根の機能を保持し、登熟を向上させるため、間断通水により土壌の飽水状態を保つ。
5. **紋枯病の常発地や前年発生ほ場、茎数の多いほ場では発生に注意し、防除を徹底**する。  
粉剤での防除適期は、出穂前10～14日である。
6. いもち病の箱施葉が行われていないほ場、いもち病の常発地及び葉色の濃いほ場を中心に巡回を行ない、葉いもちの早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。
7. 18℃未満の最低気温が予想される場合は、幼穂形成期（出穂前25～15日）では水深10cm以上の深水管理とし、減数分裂期（出穂前15～5日）では可能な限り深水管理とし、不稔籾の発生防止に努める。

<参考：草丈の伸長および茎数の増加傾向>

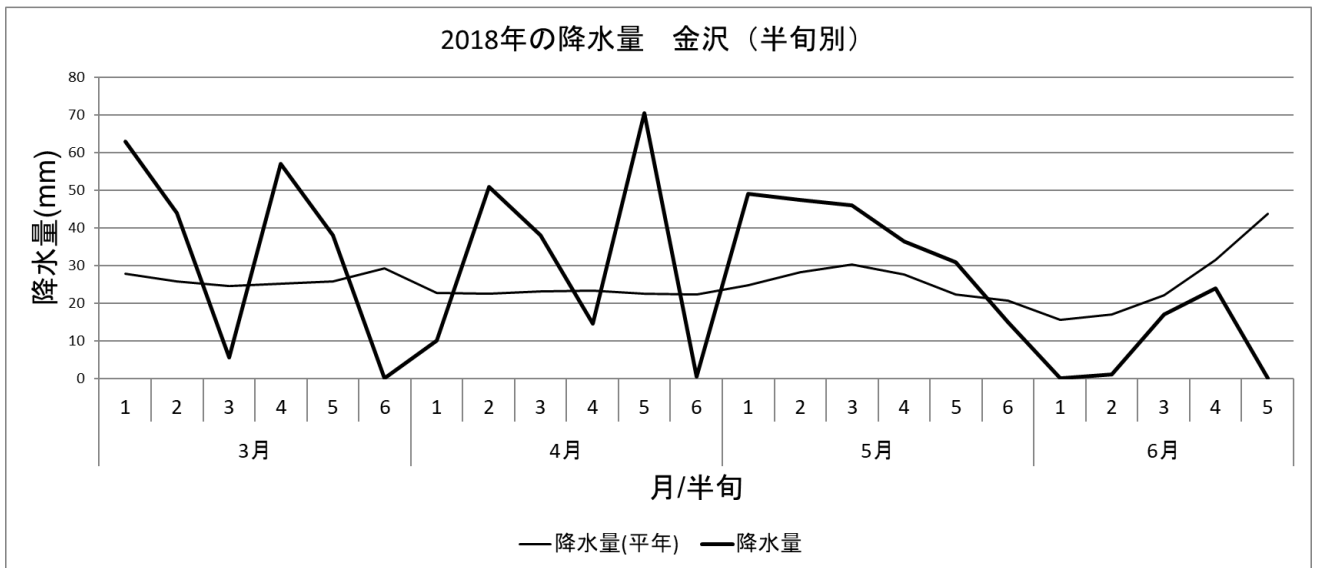
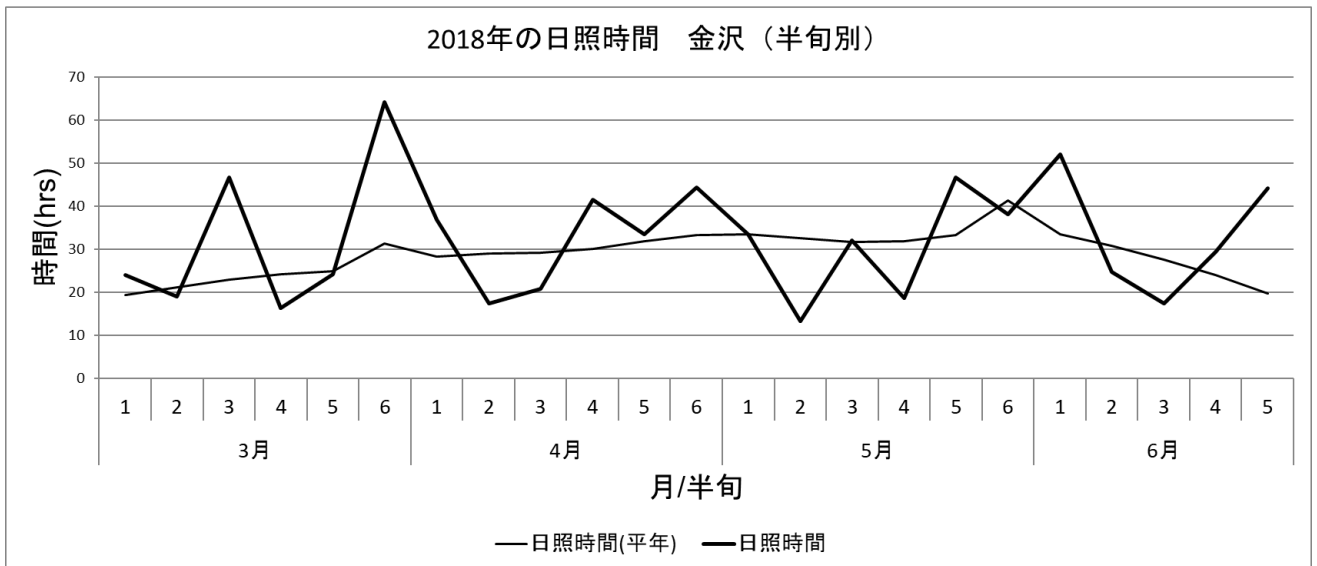
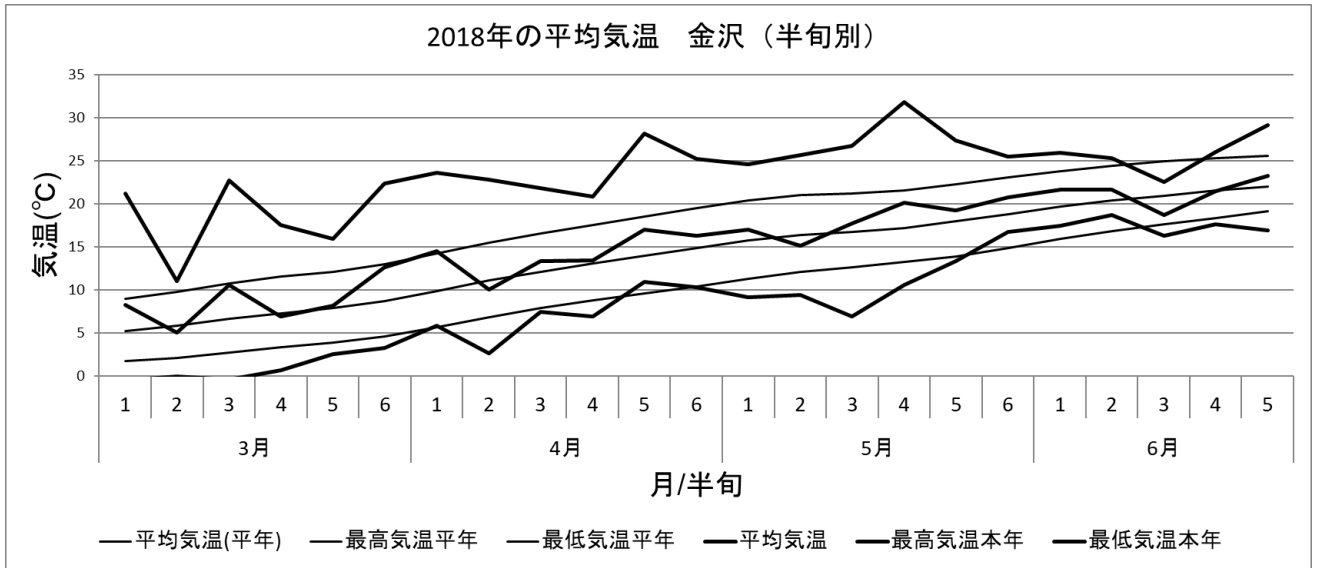
- ・葉齢を基に草丈の伸長および茎数の増加を平年と比較すると、  
草丈については、ゆめみづほは近年並、コシヒカリは平年に比べやや短め、ひやくまん穀は前年より短まっている。  
茎数については、最高分げつ期の遅れから、ゆめみづほでは近年よりやや多く、コシヒカリでは平年並、ひやくまん穀では前年に比べ多くなっている。



- また、調査日を基にコシヒカリの茎数増加を平年及び前年と比較すると、加賀地域では平年並で前年より少なく、能登地域とも平年よりやや多く前年に比べやや少なくなっている。  
 また、最高分げつ期については、加賀地域、能登地域のいずれも7月にずれ込むと見込まれ、平年及び前年よりも遅くなる。



# 気象経過イメージ（金沢気象台）



# 気象経過イメージ（金沢気象台）

